

[1]九州大学応用力学研究所技術職員技術レポート表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1956579>

出版情報：九州大学応用力学研究所技術職員技術レポート. 1, 2000-03. Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

技術レポートの書き方への一提言

九州大学応用力学研究所技術室 馬田 俊雄

技術報告集の内容はどうあるべきかについて考えてみたい。筆者は教官の研究論文をそっくり引用した記述で発表する技術報告がベストとは考えない。ただし、大きな装置の設計開発や商品開発などの技術にあつては、目的や背景が明確で、結論がしっかりした研究論文のようなスタイルになろう。しかし、技術職員にあつて役に立つ、ためになる情報はこのようなスタイルでなくても良い場合がある。即ち、装置や手法、技（わざ）があり、これによって何ができるかだけが明確に示されている場合である。このような情報をもとに、思いもよらぬ応用への足がかりとなれば、関係する読者にとっては“価値の高い報告”となろう。また、新しく同様な研究が開始される場合にあつて、すでに技術報告集において技術的な教訓や問題点が明らかにされているならば、時間の節約に貢献する。また限定的な技術であっても、既に解明されている時点までの研究費の投資が不要となるなどメリットが多い。この場合は技術を羅列し、できれば分類分けするだけで十分であろう。

もう一つの書き方として、研究にそつて技術的な側面を述べたい場合がある。論文においては記述の少ない技術的手法を詳細に記述することで、その論文の理解も深まろう。しかし、目的や背景もなしに唐突に「技術的な問題はこう解決した…」と記述しても、つながりが分かり難い。かと言って研究全論文を参考として添付した上で、技術面を追加記述するといわずらに長くなってしまふ。本レポートに掲載した「メタクリル樹脂の脆性破壊エネルギーの計測」研究における技術的側面はこのような場合の、文の組み立て方の例（内容は別として）として記述した。今後は企業など他の技術レポートも参考にして、技術者にとってより分かり易い報告を書いていきたい。